

美術専攻 洋画研究領域

モリネ ハル

森根 暖



なんでもないもの

油彩、綿布

なんでもないもの

変わるもの、変わらないもの。なんでもないもの。

この世の中にあるもの全ては、“時間”が存在する限り、変わり続けているものであって、止まることなく刻々と変わり続けていることに、少しずつ私の心が蝕まれていく。と同時に喜んでいるのだ。

私にとっての“変わらないもの”というのは、私が私でいられるものである。つまり心地の良いものである。しかし、“時間”がある以上、万物は変わり続けているわけで、当然、私の取り巻く環境も変化する。

植物は朽ち、人も動物も死に、山は壊され、街ができ、人が移動し、新しい人に出会い、友達と私も変わり、生活が豊かになり、かと思えば知らぬ間に無くなっていったものに気づき、私じゃなくなり、人も自然もなくなってしまい、そして新しい私に出会い、知らなかった感覚や感情に出会い、再び新しい人や街、花や空気を目の当たりにし、思考を辞め、それらを目の前にただぼーっとする。

“変わらないもの”というのは、私にとって心地が良く、“変わらない”ありのままの私でいられるものであるが、それと同時に“変わらないもの”に縋ってしまっている“変わってしまった”私でもあるのだ。

この世の中はなぜこんなにも、残酷で美しく、儚く楽しいもので溢れかえっているのに、私はまだ変わらないものにずっと縋っているのだろうか。私は“時間”に逆行していつているのだろうか。時間という存在が私に、変わるものへの楽しさを、少しでも教えてもらったんだ。

私が私でいられるものは、変わらないものであり、変わるものである。つまり“なんでもないもの”。“なんでもないもの”というのはとても汎用性が良い。変わるものにも化けるし、変わらないものにも化けるのだから。

今は自分語りでしか作品を語ることができないが、“今”いる、なんでもない私を、“今”描き記しておくのも、なんでもない私ではないか。